2023 年度 311 ゼミナール第5期

原発被災と教育を考える班　活動報告書

G2357　千田　菜月＜4 年＞
G3178　川内野　裕介＜3 年＞
G3436　佐々木　優海＜3 年＞
G4009　我妻　青樹＜2 年＞
G4038　及川　晃輝＜2 年＞
G4057　加藤　慧大＜2 年＞
G4066　蒲生　結香＜2 年＞
G4087　小針　愛香＜2 年＞
G4133　菅原　悠太＜2 年＞
G5114　嶋田　尚央＜1 年＞
G5137　髙橋　みのり＜1 年＞

1．はじめに

我々、原発被災と教育を考える班は今年度で5年目の活動になる。前年度は今まで行っていた被災地を訪れる、現地の方々の話を聞いてくる、見てくるといった姿勢に加え、語り継いでいく活動を経験させていただいた。

今年度は、前年度の姿勢を前提にしつつ、大熊町に大熊学び舎夢の森という幼保・小中一貫校学校が開校し、被災地にも教育機関が復活しつつある状況を踏まえ、同校の視察と校長との意見交換、富岡町の伝承に関わる元教員との意見交換を通して、教員としてどのように語り継いでいけばよいのか考えることを目的として設定した。

また、原発事故を起こした東京電力福島第一原発を視察して、廃炉作業や処理水放出の現状を間近に確かめたほか、双葉町を訪ねて復興状況について聴き取り、震災時のまま残る旧役場や小学校を視察して、複合災害から 12 年半の実情に理解を深めた。

視察は 2023 年 9 月 11 日、12 日の 2 日間で実施し、班のメンバーのほか、教職大学院 1 年佐々木侑里、3 年舩山雄太が参加した。

2．視察行程

視察行程は以下の通りである。

■2023 年 9 月 11 日（月）

1. 大熊学び舎ゆめの森視察見学
2. 南郷一兵校長先生との意見交換
3. 富岡町視察
4. 福島第一原子力発電所視察

■2023 年 9 月 12 日（火）

5. 青木淑子さんの聴き取り
6. 双葉町役場で聴き取り
7. 双葉南小学校と旧双葉町役場視察

３. 大熊学び舎ゆめの森視察見学、意見交流

【大熊学び舎ゆめの森視察見学】

私たちは、大熊町にある認定こども園と義務教育学校を一体にした町立の教育施設「学び舎ゆめの森」を訪れた。原発事故により大熊町は会津若松市に全町避難となり、学校も長く同市内で運営されてきた。復興事業の進展に沿って、学校施設の建設も進み、2023 年度の１２年ぶりに大熊町で学校が再開された。初の登校日には、子どもたちが町を歩く姿に涙する町民もいて、写真を撮っている人もいたそうだ。

新設の学校は「温故創新」を教育方針として、誇りを持って自分の未来を切り拓けるようにするために、個別最適な学びを大切にしている。

また、1分1秒成長する子どもたちに、問いを持ち、幼児の遊びのような没頭する力をずっと持ち続けてほしいとして「生涯幼稚園児～熱中する探究者～」を目指している。

自分で学びをデザインできる多様性と混在が共にある、新しい教育空間をコンセプトにし、様々な工夫がされている。興味を持ったものをいくつか紹介する。

1つ目は、図書ひろばを中心に、子ども園、小学校、中学校、職員室と放射状に広がった配置であることだ。どんどん奥に行きたくなり、気づいたらもとの場所に戻ってきているというような構造になっている。また、読書のまちとして読書活動の推進に注力しており、階段が本棚になっていたり、秘密基地に見立てて物語が始まるような空間で読めたりと本に囲まれて、いつでも好きな場所で自由に読書や学習ができるようになっていた。

2つ目は、一つとして同じ部屋がないことだ。部屋の大きさや色が異なっていたり、形も四角ではなかったりと様々である。隣の部屋とつなげたり、どこでも教室になったり、机やイスを並び替えながら子どもたちが自由に学べる場所がつくられていた。

3つ目は、11 のエリアによって構成されているエリア名が特徴的であることだ。例えば、教職員スペースであれば「にこにこサポータールーム」、小学生を中心としたエリアは「のびのび学び室」、

中学生を中心としたエリアは「ぐんぐん学び室」などそれぞれのエリア名にオノマトペが使われている。このオノマトペは子どもたちがつけたそうだ。

現在0～15歳まで30人ほどが通っており、一人ひとりがのびのびと学んでいる。一般的な学校とは進んだ学びをしているように見られるが、南郷先生曰く、「文部省で出している学びをど真ん中で行っているだけ」ということだ。私たち自身も真似したい教育である。

【南郷一兵校長先生との意見交換】

校内を案内してもらった後、南郷先生と意見交換を行った。

〇どういった経緯で演劇教育を行ったのか、子どもたちにどのような効果があったか。

南郷先生の中で演劇がきているそうだ。逆に日本ではどうしてないのだろうというのが捉えで、海外では当たり前に行われている。演劇の効果は、芸術教育が育んでいく表現と鑑賞という2つの領域の中で自分の感性を磨いたり、創造のクリエイティブを磨いたりすることができる。演劇は言葉と身体で行えるため試行錯誤をしやすくコミュニケーションを内包した表現であると考えている。

〇子どもたちと関わる中で本とからめてなど意識することは何か。

せっかくこのような環境であるため、知識と活動が往還して学びを得られるようにすること。タブレットはあるが何でもかんでも調べればいいというわけではないので、そこを本とからめてできるようにしたい。

〇どういったICTの教育がされているのか。
　知識の学習はAIのドリルを使って行っている、子どもにもよるが主体的に学んでくれると7割くらいの時間で知識注入が終わるため、残りの3割の時間でレベルアップとして自分の苦手なところを復習したり得意なところを伸ばしたりしている。総合学習の探求では、習ったことをいかして深い学びになる時間を生み出している。また、文字ではなく動画で発表をつくることも行っている。

〇大熊にもともと住んでいた子どもと移住してきた子どもでは違いがあるのか。
　記憶がない世代に入ってきていることもありほとんど差がない。一番のポイントはみんなが楽しく学校にくること。

〇設備面で改善したいところや試行錯誤したいところ
　学校安全と地域活動の両立をすること。すべてが図書館なので図書館だけを開放するわけにもいかず、地域の人にも使ってほしいのでそこの両立。

〇復興や防災教育で取り組んでいる活動はあるか。
　放射線や津波のメカニズムを学ぶという知識だけではないと思っており、究極な思考判断、行動力というのが防災教育だから、すべての探求を通して身に付けていくことが力を発揮できるのではないかと考えている。

〇放射線教育は受けているのか。
　先生たちの講座は行っているが、子どもたちに一斉に向けては行っていない。これから自分たちで畑をつくってもらい、持続可能な大熊に貢献するような開発を行ってもらうが、そうなると絶対に放射線のことは気にしなくてはならない。必要に応じて放射線について学んだり検査をして安全性を確かめたりするような形で行っていきたい。

〇子どもの主体性を引き出す工夫と主体性の先に望んでいること。
　子どもたちが自分の生きたい社会を自分でつくってほしいし実現してほしいから、主体性を引き出す空間をつくっている。

〇チャイムがならないのはどうしてか。
　前期課程が 45 分で、後期課程が 50 分ということもあるが、これがなったらこの行動をするという、しつけられているような感じではなく、自分で自分の時間をマネジメントしていくことを大切にしている。

【宮城教育大学卒業生、鈴木香帆先生との意見交換】

現地視察の際に、大熊ゆめの森では、宮城教育大学の卒業生で 311 ゼミにも活動登録していた鈴木香帆さんが教員として赴任していることが分かり、視察からしばらくたった 12 月 18 日にオンラインで意見交換に応じてもらった。

〇鈴木先生の現在の状況

鈴木さんは現在音楽専科の先生として大熊ゆめの森に勤めている。学校の近くの大熊の職員宿舎に住んでいる。希望してゆめの森にやってきたわけではなく、配属でたまたま大熊にやってきたそうだ。学校の校舎が完成するまでは会津に 2 年間いて、学校の引っ越しを経験した。会津ではやはり近所の人が被災したと批判的に学校を見る人も少なからずいたそうだ。ゆめの森に配属が決まったとき、家族が浜通り出身だったことから運命を感じたそうだ。大学で被災地のために何もできなかった意識があったからか、よりやっと被災地のために動かなきゃという思いを抱いたと語っていた。

苦労したことは、学校の所属は浜通りだったため、初任者研修が相双地区で行くのが大変だったことだそうだ。

〇震災被災時の経験

震災時鈴木さんは福島県郡山市に住んでいた。当時 6 年生で駅前の近くにいた時に地震がきたそうだ。被災直後に鈴木さん本人は避難せず、相双地区の夜の森に住んでいた鈴木さんの祖父、祖母を受け入れていた。

〇ゆめの森の学習について／学校の現在の状況

教員の仕事の大変さとは人数不足だと鈴木さんは考えていた。被災地区の学校は他の学校よりも教員数が多めで、かつ生徒は少数である。ゆめの森は他の学校に比べ、先生一人に対する児童生徒数が少ない。よって大人数のクラスよりも児童に向き合えているとおっしゃっていた。

ゆめの森は理念先行ではないのか、という質問に対して、現在ゆめの森は創造的演劇教育や総合の時間に力をいれていて、子どもたちが育っていることを感じている。カッとなりやすい子や

悪口を言ってしまう子がだんだん優しくなった。それは特性を持った子と日常的に関わったり、演劇学習で表現力を伸ばしたからではないかと鈴木さんは見ていた。演劇学習はプロの演劇の先生が臨時教師免許を持ち学校に常駐し行っている。この学習で人前で自分を表現することや、自分の意見を発表することができるようになった子が増えたそうだ。子どもたちへの思いが大事で、理念の中で子どもと向き合っていくのが大切だとおっしゃっていた。マイナスな質問だったが、決して悪いイメージはないということを伝えてくれた。

子どもの人数は徐々に増加していて、会津に分校としてあったときより大熊に来てからの方がクラスの人数が約 2 倍になったそうだ。大熊出身の子どもよりも県外からゆめの森のカリキュラムに魅力を感じて来た子の方が多い。誰よりも優しい学校を作るのが学校の基礎で、どんな子が来てもうれしいとおっしゃっていた。子どもの数が増えている中、他の先生とのコミュニケーションを通じて体制を整える必要性を感じていて、その都度対応を考えていかないといけないと語っていた。

通常の学校に取り入れて欲しいところがあるか聞いてみたところ、学校のカリキュラムがそれぞれあるので、各学校が各目標に真摯に向き合っていくかが大切だと述べていた。他の学校に転勤になった場合は、ゆめの森で得た知識を持って、使えそうなら活用して学校の方針に向き合っていきたいと語っていた。

ゆめの森の校舎は、地域の人にも貸し出していて、授業優先で被らないようにしているが、地域一体となって活動できる場になっている。街探検の授業では大河原地区を歩き、児童の祖父の家や施設をみているそうだ。地域の運動会にも参加して、地域同士の繋がりの深さを感じた。

〇原発の授業について

原発についてゆめの森ではどう教えているのか聞いた。現在の小中学生には原発と言ってもわからない子がいるそうです。野菜や動物を学校で育てている過程や、魚が釣れない状況にあることから放射線の話をするそうだ。身近なところから繋がりをもってきっかけを作り、課題が見えたときに専門の人や、中学校理科の先生に流れるように学ぶようにしたいと述べていた。

実際の状況として、学校のカリキュラムに放射線の授業は入っておらず、知識や理論の放射線教育はしていないそうだ。先生方の手腕に任せている状況である。なぜこのような状況になっているのかというと、先生方がまず放射線教育研修をする必要があり、その途中だからと聞いた。思いをもって放射線教育や安全教育をしたいと語っていた。

○復興教育にかける鈴木先生の思い

復興を戻ることと見る人がいる一方で、変えていくことだと見る人もいる。大熊の子だからと重責を負わすわけではないが、大熊で学ぶことの価値はあると述べていた。

ゆめの森では、子どもの特性や個性にひとりひとり向き合う教育の本質的な部分に携われることができる。被災地を原動力として、大熊でもう一度教育活動を行いたいと語っていた。4 月に他の先生方と復興に対する意見や姿勢を話しあったそうだ。ゆめの森に行った際、その時のメモとみられるものも見られた。大熊町出身の先生がたくさんいて、中には奈良県にいたが戻ってきたという先生もいた。ゆめの森には大熊に思いがある先生がたくさんいて、地域の行事を学校の教育活動に活かそうという働きもあるそうだ。

被災したというネガティブな面を持つ場所から子どもたちを新しい教育方法で学ぶ環境を作っているというポジティブな活動をしているのをどう見ているのかという質問がでた。現在の大熊は大熊町民が少なく、町を運転していてもボロボロな家が見える、景色としてはまだまだ悲しい状況だ。子どもが学級以外のことも考えられるような学びや地域との関わりを大事にしたいそうだ。凝り固まった考えをなくして、謙虚に走りぬいて欲しいと語っていた。

【考察】

学校の視察と南郷校長先生、鈴木香帆先生との語り合いを通して考えたのは、原発被災による全町避難という厳しい状況にあった大熊町で、学校が再開したことの意味だった。

校舎は認定こども園と義務教育学校が一体型になった造りで、図書空間などを大胆に取り入れた斬新な建築物になっていた。それ自体が、被災地から新しい学校教育を創り出そうというメッセージのように感じた。

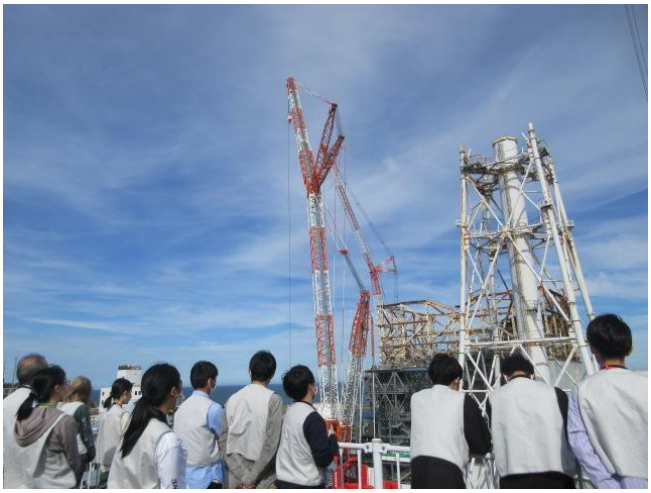
建て物だけでなく、その教育方針は、原発被災地だけではなく、全国の教育現場に現在求められている教育の最先端・理想像を発信しようとしているものと受け止めた。知識以上に「ゆめ」や判断力を育むための学校を目標として掲げ、演劇教育を取り入れたり、遊びの空間を重視したりしている。「生涯幼稚園児」と称して、ゼロ歳児から中学生までシームレスな探求型の学びを目指している点に目を開かされた。

町外、東北以外から、この学校に子どもを通わせたくて移住してくる人もいるという。南郷先生、鈴木先生ともに、様々な子がいる中で、思いを持って、子どもたちと向き合っていくことが大切であることをおっしゃっていった。原発被災のこと、放射線のことをどう伝えているかについても、日常の身近な屋外活動などの中で自然と関心を持つ方向で取り組んでいるということで、特別に構えるのではなく、日頃の学びからそれらが可能になるという視点も学んだ。

子どもたちの初登校の様子を涙と拍手で眺めていた町民がいた、という話も聞いて、学校という場所・存在がいかに地域や住民にとって大切なのかについて、思いを深めた。大熊町に学校が戻ってきて子どもがいるということは、地域の人たちを元気づけるのだなと感じた。

今後は少しずつ大熊町に人が戻ってきて、この学校を求めて町内外から子どもたちが集まってだろう。被災地発のゆめの森のチャレンジを見つめていきたい。

4. 福島第一原子力発電所



【視察】

福島の実情について詳しく知りたい我々は、武田先生のご協力あって福島第一原子力発電所内部の視察を行うことができた。その時の行程と講話の内容をこの項では記載する。

福島第一原子力発電所(以下、原発)の視察は、他の団体と合同で行われた。初めに廃炉資料館に集められ、そこで職員の方から視察時の説明があったのち、バスに乗って原発まで移動した。原発内でのスマートフォンなどの端末の利用や11111234567写真は制限されているため、道中の撮影もすることはかなわなかったが、周辺にはテロ等の防止のため警察が待機していた。敷地内に入り、初めに入館証明を渡され、空港にあるような金属不正持ち込みを禁止する、金属探知ゲートをくぐり、線量計を渡されて視察が始まった。敷地内も基本はバスで移動し、原発側が提示したルート通りに施設を巡っていくことになった。

初めに、処理水が入った水とそうでない水で飼育している生物の比較実験を行っている場を見学した。処理水の安全性の証明と風評被害を防ぐために、飼育生物に大きさや成長度合いを調べ、差がないことを記している。また、処理水を用いたことでの生物濃縮もないことを実証していた。飼育生物はアワビとヒラメであり、実験のモデルはすでにこの分野で行われている先行研究を参考に行ったものであったそうだ。移動中の敷地内には、アルプスやキュリオン、サリーなどの汚染水を浄化する設備や、そこで用いた使用済みフィルター、事故当時に用いた汚染水をためておく大規模なタンクなどが残されており、浄化設備以外は廃棄処分を待つ状態となっていた。その後我々は、ブルーデッキという場所を訪れた。ここからは、原発の1号機から4号機を一望することができた。原発の原子炉建屋内で水素爆発が起こった原因についての説明があったのち、解体方法についての説明があった。今の状態でがれきの撤去を行うと、崩れたときの衝撃で汚染物質が舞い上がってしまうため、まずは1号機をまるごと囲うような大きなカバーを作り、その中で解体を進めていくそうだ。2号機は、唯一水素爆発を起こしていない建屋であったため状態がよく残っている。これから燃料の取り出し等が行われるそうだ。3号機も水素爆発が起きていたため、1号機と同じように大きなカバーで建屋を覆っている。既に建屋内の燃料の取り出しは完了しているが、燃料デブリはいまだ残ったままである。4号機はどの建屋よりも早くすべての燃料の取り出しが終わっており、建屋が残るのみとなっている。また、この周囲深さ30メートルには、地下水の汚染による汚染水の発生を防ぐ氷の壁が埋まっている。これらは、周囲を囲む配管の中をマイナス30度の塩化カルシウム水溶液が流れており、そこから凍結管が伸びておりその周囲に氷が成長している。さらにサブドレンという設備が点在しており、地下水をくみ上げて浄化設備へと流れていき、除

染をしたのち海へと排水している。なお、この排水にはトリチウムが含まれているが、5年ほど前からすでに排水が行われていたそうで、漁業関係者も苦渋の元了承済みとのことだった。

その後、再びバスで移動し、ブラスト処理を行う施設や以前フルに使われていた凍結機などの設備、奥に見える5号機・6号機を見ながらグリーンデッキという場所へ向かった。ここは、5・6号機や処理水の海洋放出設備を見渡すことができるように用意された場であった。ここで処理水の排出までの道筋を説明された。処理水は、処理設備を通して国内基準よりも大幅に少ない 1/40基準までトリチウム濃度を減らされたうえで、海岸から1キロ離れた海底に設置された装置から排水している。この地点は、普段は漁業がおこなわれていないエリアであることや、処理水を薄めるために取り込む海水に排出した水が混入しないために流していた。我々が訪れたときは、7780㎥の処理水を17日間に分けて排水したあとであり、次の排水に向けて用意をしているところであった。最後にわれわれは、アルプスなどの浄化機でトリチウム以外の除染が完了した処理水を実際に目撃した。汚染物質のほかにミネラルなどもすべて取り除かれているため、飲んだところでおいしくはないそうだ。外見は一般的な水や水道水と特に変わった印象はなかった。キュリオンやサリーを通すことでセシウムなどのほとんどの汚染物質を、さらにアルプスを通すことでストロンチウムまで取り除くことができる。しかし、ここまでしてもトリチウムだけは取り除くことができず、海水で薄めることで濃度を規定値未満にして排水しているとのことであった。

測定器などが回収され、身体表面の汚染を確認するゲートを通り、視察は終了となった。廃炉資料館まで戻り、質疑応答に移った。

【質疑応答】

〇視察のルートを説明して頂いたときに防護服を着なくても良いという指示があったが事故後の映像を見るとほとんどの人が防護服を着ており、安全性について疑問に思った。

事故後は防護服を着ていた。空気中に放射線を浴びた物質が飛び散っている可能性があり、呼吸などで吸い込むと非常に危険だったため。今はだいぶ改善されたので防護服を着る必要がなくなった。

〇アルプスの処理装置は国際的に見て先進的な技術なのか

元もとアメリカの技術。それを東芝や日立で作ったもの。

〇処理水放出の際に使用したフィルターはその後どう処分されるのか

大型廃棄物保管庫にいったん保管される。福島第一原発の施設内で発生した廃棄物は汚染の有無にかかわらず敷地外に出せない状況。厳重な警備システムが設置されており悪用されないようにしている。

〇処理水などが入った施設内の無数のタンクは無くなるまでにどのくらいの時間がかかるか。また、目途はついているか。
　トリチウムの入った処理水を海洋放出するにあたって、濃度の薄いものから順に始めていくことになる。トリチウムの半減期が 12.3 年であるため濃いものは後回しにします。施設内のタンクがなくなった後は、新たに施設を建設する予定。海洋放出が進み、10 年後には今のタンクの風景が変わっていると私は思っている。

〇トリチウムによる生物濃縮は起こらないのか。
　起こらない。トリチウムに関しては世界中の科学者が実験、研究を重ねており安全性は保障されている。

〇処理水の海洋放出について世界でも注目されていますが海外の人が福島第一原発に視察に来ることはあるか。
　年間で 1 万 4 千名ほどをご案内している。そのうちの 1 割ほどが海外の人である。
処理水について世間ではたくさん情報が飛び交っていますが、まずは自分の目で確かめて頂きたいという思いがある。それを周りの人に広めて頂く、私どもの思いよりも率直にこんな景色だったよと伝えて頂くことが一番の願い。そもそも福島第一原発がどんなところで、何をやっているのか分からないところから風評被害は生まれてくると思っている。まずは一度実際に目で見てもらってそこから感じたことを身近な人に伝えていってほしいと思っている。
その点に関しては正確で分かりやすい情報の発信が重要だと思っている。処理水のポータルサイトでは多言語で説明をしている。実際に目で見て頂くのが良いのですが、必ずしもできない状況は生まれてくると思うので、サイトの方で正確で分かりやすい情報をいち早く発信できるようにしている。

〇モニタリングポストに関して、陸側は増えている印象だったが、海洋側は増えているのか
　海洋側も増えている。今まで以上に広範囲に増やしている。同心円状に網羅する形で配置している。

〇今後の展望などがあればお聞きしたい。
　今は決まってない。私の考えではあるが、福島第一原発での事故という歴史を何らかの形で残していきたいと思っている。

○福島に住んでいる子どもたちが地域理解のために漁業、農業について考える授業があると思うが、そのような子供たちに向けて福島第一原発側が提供していることがあれば教えてほしい。

放射線に関する情報を分かりやすく記した資料を作っている。難しい言葉を使わずにイラストで説明しているものがある。今言って頂いたことはとても重要なことで、県内の先生方が計画し、複数の高校が一緒になって施設を見学したり、学校に我々が行って彼らの会に参加させて頂いたりしている。教育関係の方もたくさん視察にお越し頂いている。その都度先生方と話し合い、新しい取り組みについて考えている。

【考察】

施設の見学から質疑応答までの視察を通して、原発班での福島第一原発の視察は今回が初めてである。今まで動画、画像などの資料でしか見たことがなかったものが今回は実際に見て、思い巡らせることができた。

東電の職員の方々は何度も「まずは一度この施設に足を運んで欲しい」とおっしゃっていた。私たちも福島第一原発がどんな施設で、何をしているのかを他の人にも見てもらいたい、教えたいと強く思った。安全性を保ちつつ着実に廃炉作業を行う計画についてよく理解したのもそうだが、それ以上に東電の職員の思いや考えを肌で感じることができたからだ。

大変な事故を起こしてしまったという事実を一身に背負いながらも、前を向き撤去を進めている姿をもっとたくさんの人に伝えたいと思った。これから必要になってくるのは情報の共有とたくさんの話し合いだと思う。地域の人や国と協力して進んでいかなければならない。

5. 青木淑子さんの聴き取り

NPO 法人「3.11 富岡町を語る会」で原発被災地の出来事といまを語り継ぐ活動を続ける青木淑子さんから、語る会のカフェで話を聴いた。青木さんは富岡高校の校長を務めた教員の視点から、原発被災を語り継ぐ視点、教員としての役割などを幅広く話してくれた。

○「文化」に秘める思い

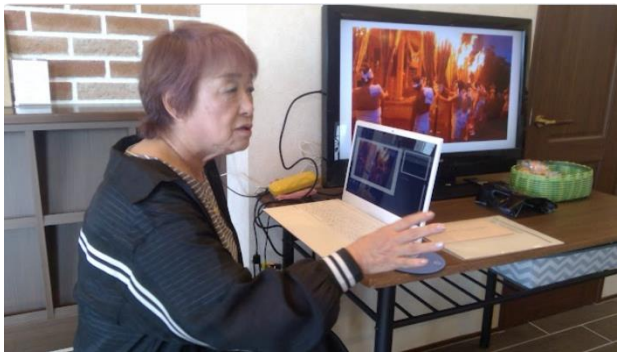
青木さんはお話の中で、文化について触れていた。一つは地区によって生み出される新たな文化、二つ目は地域に根付く文化についてだ。

一つ目の地区によって生まれる文化についてだが、現状双葉郡に合併すれば一つになっていいねというような声が上がるように、地区の合併について話された。とてもきれいな言葉であることは認めつつも、その土地その場所にあるもの・文化は異なるため、融合が必要なのではないかとおっしゃられた。また、そのような新しい地域では人数が少ないため、意見が通りやすいという話も一緒になさっていた。意見を出し合いながら歩み寄る姿勢にも言及なされていた。

二つ目は、地域に根付く文化についてだ。青木さんはお話の中で、福島県指定重要無形民俗文化財に登録されている麓山の火祭りのお話をしていただいた。このお祭りのメインは白褌姿の若

衆が大松明を肩に担ぎ、頂上を目指して上っていくというお祭りである。このお祭りに関して、主に文化の継承についてメインに担いでいる大松明を引き合いに出した。この担いでいる大松明は最長で 3 メートル、重さは約 40 キロあるそうだ。そして、この大松明は持っている本人が製作するものらしい。青木さんがこの祭りは震災・コロナ明けの久し振りに行われた祭りで、この大松明を見て文化の継承について思ったことがあったそうだ。上った後、再び降りてくるそうだが、その時に残っている大松明が少なくなっていると感じたそうだ。今までは、祭りに参加していた先輩の担ぎ手に制作方法を学び、自分自身で大松明を作成してきたそうだ。しかし、震災やコロナの影響により、上の世代からの継承が減少し、大松明の質が落ちて、燃え切ってしまったのではないかというお話だった。文化財に指定されていても、震災を機に影響があるということを感じた。祭りがある＝人が・つながりが生きているということなのだと考えた。

〇原発依存の町、富岡町　野球ボールは語る　富岡高校にて



青木さんの話によると、震災以前の富岡町は「福島のチベット」・交通がとても不便・学力地盤沈下地域などと言われていた、印象を持たれていたそうだ。特に原発に依存し、貧しい地域だったそうだ。そのような中で、青木さん自身が富岡高校の校長先生であったときに、福島県の威信をかけた双葉町教育構想に巻き込まれ、スポーツを主にした国際人（単に英語が話せるというのだけではなく、宗教間の違い、他者との違いを認められる人）を育てるような国際スポーツ科が設けられた。かつ、地域の人も協力し、この活動に取り組んでいたそうだ。しかし、震災を境に子供たちは消えた。国際スポーツ科という特殊な形だったため、高校に残る人数は多かった。しかしその後は校舎がないために、3 か所に分かれたサテライト校（サッカー・静岡県、バドミントン・猪苗代、その他・福島県内）での生活を余儀なくされた。子供たちはなんの理由もなく、納得できる理由もないままバラバラになったのだ。

このことから、青木さんは、高校のグラウンドに落ちていた野球ボールとともに、原発事故だからこその特徴について話した。私も写真を見たが、一見、落ちているボールだった。普通の光景に変わりなかった。そこで青木さんは、人が語らなければ、原発事故があったことはわからないということを語った。この写真は津波や地震のような被害はこの写真からは見られないが、確かに異変が起きている。人が伝える・語ることの重要性を感じた。

〇コミュニティの破壊

青木さんは繰り返しコミュニティの重要性に言及していた。

青木さんによると、この県道に並ぶ車が、最後に町民みんなで撮った写真ではないかと言っていた。これは震災時に撮られた写真で、日本史上初の原子力緊急事態宣言時のものである。最初

は 5 キロメートル以内に避難指示が出ていたが、それが 10、15、30 キロメートルと広がっていったそうだ。そのため、原発から離れており、津波の被害が大きいいわき市から離れている一車線しかない県道を避難道路に使用したときの写真である。原発を作るなら、道路は滑走路ほどの大きさにしてほしかったと青木さん。写真を見ればわかるが、写真の奥まで渋滞している。

そしてこの人たちは、これが既存のコミュニティの最後だということを知らない。青木さんの話によると、多くの人はすぐ戻れると口々にしていたようだ。その後バリケードもはられ、一帯が進入禁止になった。

富岡町から避難する町民らの車で渋滞する道路＝12日午前7時30分ごろ

©福島民報社

その後、青木さんは人々の苦悩に触れた。一時帰宅のバスでは朝は元気でも帰ってくると活力を失う人々、人を信用できなくなってしまった人、家族で一緒にいることを選び避難先で息子娘と新たに暮らし始める人、先祖代々の土壌を失いソーラーパネルの設置場所として貸し出す農家。多くの人を見てきたという。そのようなことで帰ってこない人がいる状況で、新たなコミュニティを歳相応にして作りづらい事態が重なっているという。

このことから、一度失われたコミュニティの再建はとても難しく、新たなつながりができるまでも時間がかかるものだと感じた。私もこの写真が最後になるとは当事者だったとしても思わないし、また戻ってくることができると考えるだろう。

また、原発事故の地震や津波とは異なる傷跡に触れることができたと思う。上記の写真のように被害を目にすることなく、そのままの姿で人がいなくなる。またおいていかなければならない。そんな状況を自分ごととして考えることができたと思う。

○行動を起こす重要性　～賛成か反対か～

青木さんが力強く話していたことに、自分の意見をはっきりさせる、行動するということが挙げられると思う。

「私は少なくとも学校で子供たちの前に立った時、私ちゃんと自分の思いを行動する人間だよって言いたいと思う。」「自分の思ったことを行動に表したり、自分のやっていることが、本当にこれからの自分の育っている町とか、子供たちを幸せにできるかなという基準をもつことに、学生時代身に染みて感じた。」と青木さんは語った。学生闘争時代に自身も巻き込まれていたことを引き合いにこのことを語った。

また、理解をしてもらうために話す大切さも語っていた。現状個々の地区で育ったものは放射線量を計測して、そのシステムが定着しているそうだ。計測されていること、もしかしたら一番福島が安全ではないかと語るほどであった。

○崩壊と創生の狭間で

「崩壊と創生の狭間にいる」―青木さんが語った言葉だ。今もまだ原発事故は終わっていないという。失った人や信頼を取り戻すにはかなり時間がかかると思われる。

現状、富岡高校は最後の卒業生を見送った後、平成 29 年度 3 月末をもって休校したままだ。若い人が集まらない現状に青木さんは、学校がなければ若者は集まらないと語った。これは大熊町学び舎ゆめの森の南郷さんも同じことをおっしゃられていた。南郷さんは若い人がいないのに学校を作ってどうするといわれたそうだが、自身は青木さんと同じ考えを持っていたそうだ。場所があるから人が集まるということを納得できたと感じた。

○原発と町に対するこれから

青木さんは、今後処理水が継続して放出され、福島原発がなくなるまでの責任について言及した。これから 40 年 50 年たっても安全を保障しながら作業を続けることが果たしてできるか。そして我々側もそれを信用し続けられるかがカギになると語る。強い口調で、処理水放出に反対する人がいるが、それ以外の案を教えてほしい。果たしてその方法で原発をなくすことができるのかと語った。

【考察】

今回の話を通して、いまだに復興が終わっていないことが分かった。青木さんが語った「崩壊と創生の狭間に我々はいる」はそれを表す表現だ。多くの学校がいまだに休校していたり、原発の処理水問題や空き家や農地問題など課題はまだある。しかし一方では、地域の祭りが行われたり、青木さんのように街に戻ってくる人がいたりと、復興し始めている面もある。復興のスタートはすでに始まり、震災以前に戻そうというよりも、むしろ新たな街になろうとしているようにも見えた。

そんな中でも我々は、原発事故を語り継ぐ必要があると考える。青木さんがおっしゃられていた通り、原発事故の悲惨さは、写真を見ただけではわからない。誰かが語らなければその実態はわからないのだ。その当時の実態把握、これからの復興を語り継ぐためにも現地に足を運んだり、お話を聞いていく活動が必要だと考えた。

６．双葉町役場で聴き取り

2022 年 10 月に双葉町で業務を再開した新しい双葉町役場で、復興を担当する復興推進課主幹の藤岡俊之さん、復興推進係長の守谷信雄さんにお話をお聞きした。

【双葉町の基本情報について】

双葉町は人口 7,140 人、世帯数 2,611 世帯(H23.03.11 時点)の海や山など豊かな自然に恵まれた盛んな農業や海水浴場などがある歴史と文化の町であった。東日本大震災によって津波と原発被害に遭い、179 人の方が亡くなった。東日本大震災が発生したあと、全町避難指示により川俣町へ避難し(3月１２日)、その後さいたまスーパーアリーナへ避難した(3月１９日)。最終的に加須市・旧騎西高校へ避難した(3月３０，３１日)。平成 25 年5月に避難指示解除準備区域及び帰還困難区域に見直され、避難が継続された。同年6月に双葉町役場機能を福島県いわき市へ移転した。令和 2 年 3 月に双葉町役場コミュニテイーセンター連絡所が開設され、令和 4 年 9 月に双葉町役場新庁舎で業務が開始された。

2020 年 3 月に沿岸部が避難解除となり、産業団地が増える動きがあった。さらに、2022 年 8 月に原発の被害の心配があまりなくなったため、特定復興再生拠点区域が居住可能になった。現在は町の 15%に立ち入りが可能となっており、これからは立ち入りできないところを減らしていくための取り組みが行われる。

【双葉町の復興の取り組み】

〇復興のスタートをきる双葉町

双葉町は令和 4 年 8 月 30 日に避難指示解除が実現し、復興のスタートを切った。その際に、双葉町は他の避難指示を受けていた市町村と違い、平成 29 年 8 月に他町に先駆けて、特定復興再生拠点区域復興計画を策定し、住民帰還に先立ち、「働く場所」を先行的に整備した。その背景には、戻ってくる住民のほとんどが高齢者であり生産者人口があまり戻ってこないという実情があった。

〇復興の先駆けとなる地域

なりわいの再生を目的とした営農再生、加えて企業誘致を行っている中野地区復興産業拠点、被災伝承・復興祈念を通じた交流人口の拡大の3つの柱を基に復興施策が進められている。復興とは何かと考えた時、経済規模が影響してくるのではないかと考えている。新しい産業が生まれ、新しい人が入ってきて、人口が少なくとも生産性が高まれば町としての復興は進んでいるとも言うことができる。どこに軸足を置くかで変わってきてしまう。9 月の時点で 72 世帯 90 人が住ん

でおり、住民の半分は双葉町に新しく来た人である。若い人の力が必要になる。この取り組みが成功か失敗かわかるのはまだ先であるが、注目の取り組みである。また、居住地として新しく、入居者同士のコミュニケーションを育むことをコンセプトとした住宅を双葉駅西側地区に建てた。土間玄関や軒下空間があり、共同スペースを設けることでコミュニケーションのきっかけを作ろうとしている。現在、住居の申し込みは 10 倍を超える倍率で申し込まれており、とても人気となっている。

【質疑応答】

〇誰のための復興であるのか。

元から住んでいた人も新しく来る人も踏まえて新しい町に復興するという意識を持っている。避難指示が出ていた時、震災当時双葉町に住んでいた人の多くはいわき市に住んでおり、双葉町役場もいわき市にあった。そして、双葉町に役場が戻ってきたいま、双葉町で暮らしているのはいわき市に避難していた町民だけではなく、新しく双葉町にやってきた人も多い。町民と移住者という壁があったが、「いつまでも移住者と呼ばないでほしい。双葉町に住んでいる私たちも移住者ではなくて町民」という意見が自治会ででており、今双葉町に住むことのできていない震災当時住んでいた町民たちの意見を聞きつつも、今ここに住んでいる、これからここに住んでいく人々の意見を大事にしていくべきではないかと考えている。

〇教育・学校について

現在双葉町には学校がなく、元あった双葉町立双葉小学校と双葉中学校はいわき市にあり、震災から 10 年以上の月日がたった今ではいわき市の子どもも通うようになっている。しかし、義務教育は町の責務であり、町内で行いたいと考えている。1から新しく作るにあたってどのような教育を行っていきたいか、震災を経験した双葉町だからできる、今の時代に求められている教育というのを 5 月から有識者や学校の先生も踏まえて考えている最中である。

〇町の復興に関して、会社を取り入れる条件などはあるのか。
　中野地区復興産業拠点に企業立地を使用とする場合には町が様々な補助をしているため、企業を集めることはすぐにできるが、より付加価値のある、双葉町に貢献しようとしてくれている企業を選ぶために内部で検討している。うまく実現した事例もあり、観光地としても活躍を期待している。まだ空きがあるため、再度選考をする予定である。

〇復興の力となる子どもたちは何人ほどいるのか。
　町民 90 人のうち 5 人（聞き取り時点）。先に述べた通り双葉町内に学校はないため、スクールタクシーを手配し、浪江町にある学校に通ってもらっている。今年は大熊町に新しい学校ができたこともあり、双葉町にもそのような明るいニュースを届けることができるように頑張っている最中である。一番最後に避難指示が解除されたこともあり、他の様々な魅力的な事例から学んでいきたい。

〇企業誘致を優先することによって働き手の男性は来やすくなるが、女性や子ども、家族連れに対するアプローチは何かしているのか。
　今現在の課題である。しかし、企業誘致を通して若い世代の企業が入ってくることで若者が増え、地域と結びつくことにもつながるし、住みたいと思う人も増えるのではないかと考えている。若い世代と共に行っていくことのできる施策に取り組んでいきたい。

〇復興していく双葉町をどのように発信しているのか。
　何かタイミングがあるごとに町づくり課が SNS で PR を行っている。これまでは震災にかかわる、語り継ぐ、負の側面の報道が多かったが、それだけではなく前向きにプラスの面で情報を発信していきたい。

〇地域のコミュニティを大切にするために何か施設を作る予定はあるのか。
　先に述べた双葉駅西側地区住宅にある軒下空間などを中心にエリアを超えて関わりを持っている。現在は町民が少ないためこのような形であるが、人数が増えてくれば震災以前のように自治会などを作る予定であり、2030 年には 2000 人が住む町にする予定である。本年(2023)の夏には盆踊りが行われ、町民やいわき市に避難している人を含めて行われた。双葉町に関わりを持つ人が集まって行っていくことができたらよいと考えている。

〇双葉町で震災以前に魅力として押していたものはどうしていくのか。
　町民の方は海水浴場に強い思い入れがあり、復活させてほしいという要望が多い。新たに観光地としてアクティビティエリアを作ることを考えており、町民の方々と一緒に何があれば楽しいか考えながら取り組みを進めている。

〇今後土地をどのように活用していきたいか。
　避難解除されていない地域も多く、まだ見通しはたっていない。しかし、震災がなければ変わらずに生活を営めた場所であることは間違いないため、住みたい人がいたら住むことできる場所にしていきたい。ただ以前に戻すのではなく、目的を持って取り組んでいきたい。

〇教壇にたって双葉のことをどのように伝えてほしいか。
　地震が起きて、夕方に避難して、寒くて寝れなかったりして次の日を迎えたらと思ったら、また他のところに全町避難して、というように文字だけを追うと自分事として捉えずらい。出来事を細かく見ていく、全町避難という一言で片づけずに、過酷な経験を自分だったらどうするか考えてほしい。
　震災を経験した子どもたちは、幼いがために良くも悪くも何も分からなかったから、過剰に守られていた部分があったが、そうではなく、その困難を経験し、踏み越えてステップアップしていくようにできたらよいと考えている。もちろん危ない時は守るべきだし、止めるべき、手を差し伸べる場面もあるだろうけれど、伸びしろを作っていってほしい。

【考察】
　復興とはどのような状態になることか、答えを出すことが難しい問いに対して、向き合い、働いている双葉町役場の復興推進課に務めるお二方は、私たちが考えていなかった答えを出していた。
　復興の形とは様々あり、完全に復興することができたということができる日はいつ来るか分からないが、様々な形から復興にアプローチすることはできる。また、震災で多くのそこに住む人の生活が破壊されてしまったという事実があるが、双葉町は町として着実に活気を取り戻し、復興に向かって歩みを進めている。関わっている人たちは震災以前に双葉町に住んでいた人だけとは限らない、初めて双葉町に来る人もいる。生まれ変わり、新しい町として成長している途中の双葉町の今後についても見ていきたい。

7. 双葉南小学校、旧双葉町役場視察
　東日本大震災と原発事故被災により、当時の緊急避難時のままの状態になっている施設が双葉町内にはまだ多くある。その中で、町中心部にある双葉南小学校と旧双葉町役場を施設させてもらった。

【双葉南小学校】
被災地視察の２日目、私たちは震災遺構として残されることが決定した双葉南小学校を訪れた。双葉南小学校は、福島第一原発事故の影響で全町避難が続いている福島県双葉町に建てられている。震災が起こった当時は１９２人の児童が在籍しており、震災が起こったときの状態で残された部分が多く残っている。

左の写真は双葉南小学校のある教室の写真である。震災当時の双葉南小学校では掃除をしており、机や椅子などの多くは廊下に出されていた。震災直後、多くの児童はランドセルを置き、何も置かず上履きのまま校庭に避難していった。その後、机や椅子を廊下から教室に戻したため、現在の教室はかなり整理されている。ランドセルを置いていった児童が荷物を取りに来ることができるようにそれぞれの机に荷物がまとめられた。しかし、放射線の影響で県外に避難したため帰還することが困難になった児童が多かった影響もあり、自分の荷物を取りに来る児童は少なく、多くの児童のランドセルや運動着袋、上履きや外靴が現在も残されている。この教室の黒板には、だれが書いたものかはわからないが、「双葉に幸あれ！！」という言葉だけが残されていた。

震災の爪痕が残されているのは教室だけではない。図書室や資料室では本棚に置かれていた本の多くが本棚から落ちて、床に散乱していた。右の写真は資料室の様子である。本棚にあったさまざまな資料が床に散乱した状態で放置されている。震災当時避難した校庭は、現在地割れなどが多くなり放置されている。そのため、校庭は草が伸び放題になってしまい、現在は立ち入りが制限されている。

今回の視察を通して、私たちは復興が比較的進んでいる地域を多く目にしてきた。しかし、震災遺構として残されることが決まった双葉南小学校では、震災当時から時が止まったようにそのまま残されている。私たちはその現状を目の当たりにし、東日本大震災・福島第一原発事故の恐ろしさを感じることができた。

【旧双葉町役場】

<u>震災前</u>

・双葉町の中枢を担う場所であった。

・役場は高台に位置しており、多くの双葉町住民の憩いの場となっていた。

<u>震災後</u>

・福島第一原発の水素爆発事故により、双葉町に避難指示が出され、その後、閉鎖されてしまい町役場としての役目を終える。

・2022 年 9 月、新庁舎が完成し、旧双葉町役場は完全に移転した。

〇震災当時の町役場の動きの流れ（2011 年 3 月 11 日～12 日）

・3 月 11 日

14時46分　三陸沖を震源とする大きな地震の発生

15時30分　大津波が双葉町に押し寄せる

16時37分　震災後初めて災害対策本部会議を役場内で実施

20時50分　福島県が福島第一原子力発電所から半径2㎞県内の避難を発令

・3月12日

7時30分　町災害対策本部で全町避難等を決定

7時40分　避難広報を行う

8時00分　町災害無線で川俣町への避難広報を行い、約220人が川俣町へ避難

14時00分　双葉町役場を閉鎖する。その後川俣町合宿所に災害対策本部を設置

15 時36分　福島第一原発1号機の原子炉建屋が爆発

〇視察をしたときの内部

・長年人が出入りしていなかったためカビく強烈なにおいが鼻を突いた。

・エントランスホールには住民の住所や電話番号が記された機密文書が推定5000 通以上が残されていた

・構内には動物が住みついており、ネズミやコウモリのふんなどが大量にあった。

・震災当時町役場で災害対策本部を立ち上げた際に使われた、模造紙（レプリカ）や避難経路などの考案に使われたハザードマップがそのまま残されていた。

・屋上には当時使われていた強大なパラボラアンテナがそのまま残されていた。

・当時この屋上から双葉町に押し寄せる大津波を見たというお話を伺った。

【考察】

双葉南小学校と旧町役場の視察を通して、原発事故が双葉町に及ぼした大きな影響をこの目で確かめながら学ぶことができた。

双葉南小学校は、震災遺構として整備されることになっているそうだが、旧町役場は解体の方向だという。両施設とも、原発事故被災による避難の状況を後の世代に伝えていくために必要ではないか、と考えた。

8. 総括・展望

【復興について】

今回の視察では、大熊町に新たに開校した学び舎ゆめの森や双葉町に戻ってきた双葉町役場、福島第一原発発電所で働いている人など、復興に携わっている人から様々なお話を聞くことができた。

復興とは何かを定義することは難しい。震災以前の状態に戻すことなのか、被災者の悲しみに寄り添い続けていくことなのか、、班員が考える復興のあり方も様々であり、絶対的な正解というものは存在しないのではないだろうか。しかし、復興に携わる方々には自分なりの復興の在り方を考え、復興に向けて尽力していた。被災地をよりよい町として復活させたいという想いを強く感じた。

理不尽にも複合災害によってそこにあった人々の営みが破壊されてしまったことは忘れてはいけないことである。しかし、破壊されてしまったから、否応にも町を真っ白なところから新たに作り直す機会に被災地は直面している。未来を共に考えていきたいと考えている。

【複合災害と教育について】

福島で起きた震災、津波、原子力災害を合わせた複合災害は未曾有の大災害であった。多くの命や営み、文化、本当に様々なものが失われてしまった。備えがあれば、知識があれば、減らすことのできた被害があると考えると防災教育は大きな意義を持つのではないだろうか。

今回視察させていただいた大熊学び舎ゆめの森では、原発についてはカリキュラムには入っておらず各々の先生に委ねている段階であり、その背景には先生側が原発について学んでいる最中ということが挙げられていた。原発のことについて知らない生徒もおり、生活の中で関連する事項が出てきた場合に触れるだけであるという。経験していない世代にどのように伝えていくのか考えていきたい。

【今後の展望】

昨年度までの活動では、様々な世代、年齢、立場の方から、震災当時のことや今に至るまでのことなどについてお話を聞いてきた。震災が引き起こした被害、つまり負の面についてのお話が多

かったように思われる。しかし、今回視察した大熊学び舎ゆめの森や新しくなった双葉町役場では、これからの未来のことについて語ってくださる人が多かった。

被災地は被災したままではなく、また元の同じ町に戻るわけでもなく、東日本大震災がもたらした破壊からもっとよい町を創造しようと歩みを進めている最中であった。これからの活動では過去の負の遺産ばかりではなく、被災地が歩んでいる今をもっと見ていきたい。

また、実際に避難を余儀なくされた地域を視察することが多かったが、避難区域に指定されていない地域にも少なからず原発被災の影響を受けた人がいるはずである。避難先に指定された地域の方々は、受け入れたビックパレットふくしまでは、何が起きていたのだろうか。浜通りではない地域の人にもお話を伺いたい。そして、原発は福島県以外にもあり、能登地震の際にも話題に上がっていた。教育という視点から、福島の原発被災と日本中にある原子力発電所を関連させた教育を行うことができないか模索していきたい。

９．感想

○4年生

G2357　千田　菜月

4 回の視察の間に，様々な変化をみることができた。1 年目にあった家屋がいつの間にか無くなっていたり，立ち入り禁止の柵がなくなり通行できるようになった場所があったり，これまでなかった施設が増えていたりとわかりやすい目に見える変化があった。継続して同じ場所を 1 年に一度でも訪れることで，自分の目で見て実感できる意味のある経験となった。また，その地に関わる人々の話をメディアを介さず直接聞くことができたため，他の意図を含めずに自分で判断することができたように思う。生徒たちにも自分で見て聞いて考えるという経験をしてほしいと感じた。これからは大学生という立場でこのように視察をしたり周りの人と話し合ったりする機会を設けていただくことは無くなるが，4 年間の間に学んだことをよりいかせるように，自分で学ぶ機会をつくっていこうと思う。

今年度はあまり活動に参加できなかったが，頼もしい後輩たちが主体となって活動を進めてくれた。本当にありがとうございました。

○3年生

G3178　川内野　裕介

今年で2回目の活動となり、本格的に視察に参加できたのは今年が初であった。武田先生の尽力により震災当時から時間の止まったままになってしまった施設や、福島第一原子力発電所、さらに町の再興を目指す人々の努力や実情を目にしたが、どれを取っても実際に現地に行かなければ知ることすらできない貴重な体験であった。震災発生から13年が経ち、当時はメディアなどからたくさんの被災地の情報を得ることができた。だが今となっては、被災地以外のテレビ局など

で情報を得られる機会は限りなく低く、現地の様子を知る術がだんだんと無くなっていっていると感じる。被災地の外の関心の薄い人間からすると、震災が起きて被災して終わりとなっている。しかし、実際には被災し、そこから立ち上がり前に進むために努力を続けている人たちが今もたくさんいて、我々は一部とはいえ、今回幸運にもその人々の生の声を聞くことができた。

私は声を受け取った人間として、その声をまた別の誰かへと伝えていく人間になりたい。将来教壇に立って震災の内容を扱う際も、震災があったことだけでなく、被災地の時間は今も前に進んでいるということも伝えたい。それが声を受け取った人間の使命であると私は考えている。

G3436　佐々木　優海

今年度で活動は 2 年目となった。前回の視察では、メディアを通してではない被災地を見ることを目的に視察に行ったが、今回の視察では被災地に対して何ができるかを考えることを目的に視察に行った。入ることに葛藤がなかったと言えば嘘になるが、福島第一原発の中に入ることができたり、様々な立場の方々のお話を聞くことができ、貴重な経験をさせていただいたことは感謝してもしきれない。

今回の視察で一番感じたことは、未来に向けた歩みは止まっていないということである。今までは福島が直面した現実に向き合ってきたが、歩みを進めている今にも向き合わなければいけないと感じた。津波で流れてきたがれきが撤去されて、帰宅困難区域が解除されて、ニュースで放映される回数が減ってなお、被災地に関わることで復興に対する支援をすることができると思うし、実際していきたい。

〇2年生

G4009　我妻　青樹

私は今年で活動は2年目だったが、去年視察に参加することができなかったので、今年が初めての視察だった。今年は被災地の現状を実際に視察し、将来の展望について視察から感じ、考えることができた。今回の視察のなかで震災から12年たった今でも震災の爪痕が残っているものを実際に見ると、原発の恐ろしさを肌で感じることができた。

今回の視察で福島第一原子力発電所に入ることができたのは、私の中で非常に大きな経験だった。私は福島県の出身のため、小さい時から原発事故現場のニュース映像を見ていた。そのため、震災に対するニュースが減ってきている影響から被災地はまだ爪痕が多く残っているというイメージが強くあった。しかし、実際の被災地はすでに将来に向けて歩み始めていた。このような学習は実際に目を通してでしか感じることができないものではないだろうか。

今まで原発班で学習してきた内容は、被災当時の状況に対するアプローチが多かった。しかし、このような被災地の実情を感じ取ることができた今、過去にばかり目を向けるのではなく、被災地の未来に目を向けた活動をしていきたいと考えた。

G4038　及川　晃輝

今回の視察では福島の震災復興の様子をこの目で確かめながら観察することができた。一回目の視察で訪れたときの夜ノ森地区のバリケードや双葉町の町の様子など変化している所が多くとても印象に残った。また福島第一原発の内部を視察したり、双葉町小学校、旧役所など、震災が起こった時から時が止まっている場所を視察したりし、改めて被害の大きさを実感した。

今回の視察で原発の事故が起こった契機やその当時その場所で働いていた人々の行動、復興が本格的に進められている福島の様子を様々な体験を踏まえながら学ぶことができた。この視察で学んだことを生かし、来年の視察に役立てていきたいと考えている。

G4057　加藤　慧大

今回で 2 回目となった福島視察だが、前回とは違い将来に目を向けた内容の視察がたくさんできたと思う。ゆめの森では子供の元気に遊ぶ姿を見ることができ、前回の視察では一回も子供の姿は見ることができなかった。子供がいるだけでこんなにも地域の雰囲気やそこに住む人の顔が良い方向に変わっていくんだと実感した。復興が進んでいることが目に見えて分かり胸が熱くなった。これからの私たちの活動で必要になるのは、調べて分かった情報をどのように伝えていくかである。来年の活動に生かせるように自分の中で情報を整理していきたい。

G4066　蒲生　結香

前回は過去に起きたことや現在の状況についての内容の視察だったが、今回は現在の状況と将来の展望などの内容だった。訪れた場所の人が皆前を見据えていて、次はどうしたいのか考えているのを肌で感じることができた。震災から 12 年変わっていくこと、変わらないこと、変わらざるを得なかったこと、変われなかったことの時間の変化が建物や車などからも見てとれた。

原発や放射線の教育はどうなっているのかということばかり考えていたが、色々な人の話を聞いて、日常で関わりのあることから知っていく方が児童生徒には記憶に残りやすいのではないかと思い直した。知識だけの授業は印象が薄く、震災を経験したことないこれからの世代の子どもは現実味がわかない可能性が高い。なので、日常から震災についてきっかけがあれば繋いでいくツールが必要かもしれないと思った。

G4087　小針　愛香

今回ずっと見学してみたかった福島第一原発に実際に足を踏み入れて、海との距離や廃炉作業がどこまで進んでいるのか間近で見ることができとても貴重だった。事故直後は、近づけず、東日本には住めなくなるのではないかと言われていた中で、12 年半経ちどこにでもあるような作業服を着て作業している姿を見て、逆に遠ざかっていたのは私の方だったと気づかされた。 また、原発によって時間がとまったままの場所、学校、役場といった過去の部分、新しい学校や新しい街といった未来の部分を見たり考えたり、話を聞いたりして、とても充実した行程だった。

今まで震災について考える際に、起きたことを調べてその事実ばかりを見ていたが、この視察で

これからどのような街にしていきたいかなど、これからにも目を向けて先のことまで考えることが大切だと学んだ。そして、今当たり前のように生活しているがいつ何が起きるか分からないからこそ、毎日の生活や日々関わっている人を大切にしていきたいと感じた。

G4133　菅原　悠太

私は今回二年生でこのゼミに入った。最初はとても緊張していたが次第に仲間と学ぶことで打ち解けた気がする。私は宮城県仙台市の出身だが、津波も原発も火災の被害も受けてはいなかった。そのため、被災したと言っても震災のことについて語れることはないと思っていた。しかし、もっと知っておきたい気持ちがあったり、教員となったときに浅はかな知識・経験ではだめだと思いこのゼミに入って視察に参加することを決意した。

この経験は貴重なもので、今しか見れない・分からないようなものが多く存在していたと思う。復興過程・いまだに終わらない被害は今しか分からないものだ。その瞬間の歴史に触れて、このように仲間とレポートをまとめられたことがとても意味があるものだと思った。経験でしか人はものを語れないと思っているので、自分を成長させる意味でも様々なことに参加していきたいと思う。

○1年生

G5137　高橋　みのり

私は、今回大学で行っているインターンと日程がかぶってしまい、参加することができなかった。でも、グループの皆さんが持って帰ってきてくださった資料や情報をもとに学習することができた。もともと出身県に核燃料の再処理工場があることをきっかけに活動に興味を持ったのだが、福島で東日本大震災の当時どんなことが起こっていたのか、どのように復興に向けて取り組んでいるのかなど知ることができて良かったと思う。また、将来子どもたちにどのように伝えていくべきなのかなど考えるきっかけにもなったので、これからにつなげていけると感じた。来年も原発視察を計画してくださっているそうなので、参加したいと思っている。